

[研修報告書]

臨床心理学コース 博士2年
金 智慧

1. 研修名：グローバル・リーダー育成、スウェーデン研修プログラム
2. 研修期間：平成30年2月18日から平成30年2月25日
3. 研修報告：

日付	訪問先・研修先	研修内容および成果・感想
2/19 (月)	参加大学の紹介 Stockholm Univ.見 学ツアー	<p>ストックホルム大学（以下、SU）・東京大学・ユヴァスキュラ大学（以下、JYU）の教員、学生による大学紹介が行われた。教員の方々による大学紹介は、主にそれぞれの大学が、どのようなカリキュラムや環境の中で教育を行っているかについての説明がなされた。同じ教育学研究科であっても、国ごとの文化や学校文化に合わせて教育の考え方やその仕方が異なっていることがわかった。</p> <p>学生による大学紹介では、母国の学生や他国からの留学生からの説明があり、所属大学の教育現場に関する意見から学校・留学生活に至るまでの多面的な視点から3つの大学を理解することができたと思われる。その後は、今回の主な研修先になったSUのキャンパスツアーに参加した。SUの学生らの引率により、図書館や学生食堂、教育学研究科の講義が行われている教育棟など、キャンパス内を見学する機会が得られた。</p>
2/20 (火)	Globala gymnasiet 高校 訪問	<p>現地の高校 Globala gymnasiet を訪問し、学生達との交流が行われた。校長による高校の特徴・モットー・学年ごとのカリキュラムなどに関する紹介が行われた。その後は、学年ごとの学生らが参加し、高校を選択した動機や興味分野、取り組んでいる研究などについて話してもらい、学生らの研究ラボを見学する時間が設けられた。訪問スケジュール終了後は、4人ほどの学生達と学内で昼食を取りながらより具体的な学校生活、それぞれの興味関心分野や研究に関する話を聞くなど、現地の学生との交流を深めることができた。</p> <p>今回の現地の高校訪問の中で印象深かったのは、学生らが自分の興味・関心がある分野や将来の計画などについてしっかり考えていること、そして自分が望む教育が得られる高校を学生自身が選ぶということ、また2年間にかけて育んできた研究計画を3年生時に実践していることである。それによって、学生達が高いモチベーションを維持しつつ、自由にかつ自分にとって有意義な学校生活を送っていることが伝わってきた。さらに、学校側は学生</p>

[研修報告書]

		に教育を与えるという立場ではなく、学生達に寄り添いながら学び合い、ともに学校という教育現場を作り上げていることがわかった。
2/21 (水)	国際シンポジウム & レセプション	<p>3大学の教員や学生らの研究に触れ、私が参加している研究チームの研究プロジェクトも含めてそれぞれの研究についてディスカッションを行う場が設けられた。シンポジウム後は、SUのFaculty Clubに参加者全員が集まり、国際シンポジウムやそれぞれの研究について自由に意見交換をするレセプションが行われている。</p> <p>本研修プログラムに参加する前から準備してきた研究を紹介すると同時に、国籍・教育背景の異なる学生や研究者からの多様な意見が得られたことは、今回発表した研究プロジェクトをより多角的にとらえる必要性に気づく機会につながり、自分自身の研究にも活かすことができると思われる。一方で、学生セッションの場は10人弱の少人数に分かれて行われたために、参加者全員の研究活動に触れられなかったのは残念であった。</p>
2/22 (木)	ユネスコ本部 訪問	<p>パリに位置するユネスコ本部を訪問。日本人職員の方々にユネスコの構造やその中での仕事について説明を受けると同時に、それぞれの職員の方々が国際機関で働くまでの経緯などについても触れる機会が得られた。その後は、ユネスコ本部の内部（国際会議室）や野外に展示された彫刻や芸術作品等を見学している。</p>
2/23 (金)	OECD Boulogne 訪問	体調不良により、休み

4. 研修を終えての感想

今回の研修を通して得た成果としては、ヨーロッパの学校を間接的に体験できたということである。韓国で高校を卒業後、日本の大学に留学している私としては、今回の主な研究先であるスウェーデンの高校・大学教育だけでなく、交流と研修の中で日本の高校・大学に改めて触れることができたと思われる。それによって韓国・日本・スウェーデンの教育現場、つまり世界各国における多様な教育現場を比較・検討できる良い体験が得られ、その体験は自分の専門領域である臨床心理学の分野においても活かすことができるのではないかと思われる。

また、同じ教育研究科であっても学年や専攻が異なる学生達が集まっていることから、教育現場に対するさまざまな視点があり、それらに触れることで自分の中における教育の考え方がより多様化に開かれたものになったと感じられた。

体調不良を理由に、最後の研修プログラムに参加できなかったことは大変残念であり、今後またこのような機会があれば是非参加させていただきたい。